宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像社会
〒811-35　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940-62-1311㈹
定価　一年送料共　1000円

神具・装束
結婚式場用品
福岡店　電話福岡(092)六五一-九四五六番
本店　福岡市博多区東公園二-三一(〒812)
京都市下京区油小路六条北入(〒600)
電話　京都(075)三四三-三三四一番
株式会社　井筒

献茶祭斎行

第十四代表千家家元
而妙斎千宗左宗匠奉納

秋の深まりが感じられる十月十七日、茶の道を志す人々にとって待望の献茶祭が、第十四代表千家家元千宗左（而妙斎・宗匠御点前により斎行された。

この献茶祭は昭和三十七年十月、当時の宗像大社復興期成会々長故出光佐三氏の御尽力により、第十三代表千家家元、即中斎千宗左宗匠が奉仕して以来、今年で二十九回目の奉納となった。この日は伊勢の神宮における神嘗祭の佳日である。

当日早朝より、福岡県内はもとより、九州各県山口県などから約千五百名の茶道にいそしむ人々が、表千家家元の御点前を拝見しようと集まり、出光興産株式会社福岡支店の奉仕により準備された約四百席の特設椅子はもとより、立見席迄、和服姿の人々で埋めつくされ本殿周囲はあふれんばかりの拝観者となった。

定刻午前十一時、斎館玄関の大太鼓を合図に、斎館より山田祢宜以下奉仕神職が参進、勅使館からは表千家家元、家元介添の高弟、出光興産株式会社々長出光昭介氏、外会社役員、九州同門会々長外幹部役員等が参進、合流の上、祓舎にて修祓の後、本殿へと進み拝殿に昇殿した。

斎主山田祢宜が、千利休より宗湛、宗左と引き継がれた不審庵表千家四百年の弥栄と「和敬清寂・清浄礼和」の茶道の本義を心に銘じ、斯道の発展に精進し、文化国家の建設に寄与するようにとの祝詞が奉上され、続いて献茶の儀が行われ拝殿にしつらえた風炉の前で、典雅な袱紗さばきも美しく淀みない御点前が披露され多数の拝観者はかたずをのみ、真剣なまなざしで見守った。やがて金箔の茶碗に濃茶、銀箔の茶碗に薄茶がたてられ、三管の雅楽の調の中、神職の手により神前にお供えされた。そして斎主、家元、出光社長等関係者の玉串拝礼が行われ、約一時間に及ぶ祭典は滞りなく終了した。

祭典終了後、儀式殿に設けられた出光席、斎館に設けられた同門会の副席にて掛軸や茶道具の逸品を観賞しながら、茶の湯の醍醐味にひたり、約千五百名の人々は、神都宗像の秋の一日を優雅に楽しんだ。

古式祭のご案内

古式祭とは、今年最後の収穫感謝祭のことです。氏神様へ一年間の神恩を感謝して今年の収穫物を捧げ、忌火で炊いた御飯をお供えし、氏子の人達が一緒にいただく神事です。

この神事は、宮中に於て陛下が神嘉殿にて新嘗祭を行われておられるのと同じ性質のものです。

この古式祭は又「延命招福」の集いともいわれますが、氏神様と共にこの一年間の喜びを分かちあうといった「神人和楽」を共にする、年に一度の集会であることに意味があります。

八百年以上の伝統をもつ宗像大社の古式祭には、特にお菓子と呼ばれる、九年母、菱餅等で作られた特殊神饌や、江口の浜よりあがるゲバサモという海藻をお供えして、お座を催すのが古来からのしきたりです。又くじが行われ、翁面・御神盃などが授与されます。

記

一、日　時　十二月十五日（日曜日）
　　祭典　午前六時
　　お座　午前六時三〇分～午前九時
一、場　所　祭典　本殿　お座　清明殿
一、お座料（一名分）　白米一升又は金五百円

今にして明治の大御代を想う

今年もまた十一月三日、文化の日、明治天皇御生誕の日を迎える。幕末から明治維新へと激動した日本、そして輝かしい明治の建設、この多事多難な時代に不出世の聖天子明治天皇を戴くことができたのは、日本にとって真に幸せなことであった。東洋の他の国々が例外なく西欧先進諸国の侵攻と植民地化を甘んじて受けなければならなかった中で、日本だけがどうしてこの危機を乗りこえることができたのであろうか。

攘夷か開国か、沸騰する国論と激しい争乱の中にも、常に脈々として流れていたものは尊皇の精神であった。徳川将軍が日常の政権は担当していても、その上に厳然として天子様がいらっしゃることを多くの国民は知っていた。だから幕府が政権担当の能力に限界がきたとき、進んで大政を奉還して明治維新が実現したのである。幕末から明治へ、日本がよく国の独立を全うし、やがて近代国家の基礎を固めることができたのは、皇室の御存在なくしては到底考えられない。

奇しくも明治天皇は黒船が浦賀に来航した前年に御降誕になっており、筆者は多難な日本に対処されるため、天つ神の神議りにより、神武天皇の御再現としてこの国に降臨されたように思われてならない。

○

慶応四年三月十四日、明治天皇は文武百官を率いて紫宸殿に出御せられ、天神地祇を祭って新政の国是五箇条を御制約になった。「広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ」以下の五箇条は、百二十余年の今日なお、現代的意義の大きさに驚かずにはいられない。

昭和天皇が敗戦後の昭和二十一年元旦に下された『新日本建設ニ関する詔書』には、冒頭にこの『五箇条の御誓文』が掲げられている。天皇はこの詔書をマスコミなどが、天皇の人間宣言と称していることを遺憾とされ、後年、「わが国の民主主義は明治天皇の五箇条の御誓文に明らかであり、輸入ものでないことを示して国民に自信を持たせるのが目的であり、神格云々は二の問題」との趣旨を記者団に語っておられる。

葦津珍彦氏によれば「五箇条に示された思想は西欧先進国からの直輸入ではなく、また明治元年忽然として現れたものでもなく、嘉永の黒船以来幕末の苦闘の中から、日本みづからの体験によって生み出された理念である（明治維新と現代日本）」と言われるが、この御誓文は明治新政の国是として日本の進路に対する大きな指標となり、さらに大日本帝国憲法制定の土壌ともなったのである。

○

明治天皇は五箇条を神明に誓われたその日、国民に対して御宸翰を下された。

朕幼弱ヲ以テ猝ニ大統ヲ紹キ、爾来何ヲ以テ万国ニ対立シ、列祖ニ事ヘ奉ランヤト、朝夕恐懼ニ堪ザル也…今般朝政一新ノ時ニ膺リ、天下億兆一人モ其處ヲ得ザル時ハ、皆朕ガ罪ナレバ、今日ノ事、朕自ラ身骨ヲ労シ心志ヲ苦メ、艱難ノ先ニ立（後略）

と仰せられているが、天子としての深い御自覚と率先、御身を以て艱難にあたらんとする烈々たる御気魄は、その後四十五年の大御代を通じ、終始つらぬき通されたのである。

御誓文の後二十余年を経て、〝明治維新の歴史の法的總括〟とも言われる『大日本帝国憲法』が発布された。神武創業に因んで紀元節の当日、明治天皇は賢所で御親ら御告文を奏され、この憲法が「皇祖皇宗ノ後裔ニ躬シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述」したものであることを明らかにされた。

○

然るに敗戦の結果とはいえ、憲法は占領軍作成の『日本国憲法』に改めさせられ、既に四十余年を経過した。今日の日本は平和と繁栄を満喫しているが、湾岸戦争における他国籍軍への参加要請など国際協力を求める外圧のため、はしなくも現憲法の非現実性が露呈し、その改正が世上論議されるようになった。現下の日本は政・財界といわず一般的に国民精神が弛緩し、経済大国もやがてバブルとなって消滅しかねない。日本は速やかに敗戦後の残滓を拂拭し国家としての主体性を確立すると共に、明治の精神を基礎とした国民精神の高揚と道義の作興を図らねばならない。

新内閣も発足するが、西郷隆盛の遺訓「正道を踏み国を以って斃るるの精神なくんば、外国交際は全かるべからず。彼の強大に畏縮し、円滑を主とし、曲げて彼の意に順従する時は、軽侮を招き、好親却って破れ、ついに彼の制を受くるに至らん」を掲げて筆を措く。

（神社新報より）

余滴

この春、宗像地区中P連の有志が、任意の団体「オガチクラブ」を組織した。

オガチと云うこの名前は、宗像沖ノ島に生息する野鳥オオミズナギ鳥の愛称である。

来年早々、宗像市と、韓国金海市が姉妹都市を結ぶことになった。

金海市は、韓国南部に位置する古代王国「伽耶国」である。この「伽耶」から、海北道中沖ノ島を経由して多くの文化が日本にもたらされたのであろうことは、想像にかたくない。

八月中旬、オガチクラブが海の正倉院沖ノ島へ渡島、沖津宮の祭祀遺跡を見つめる。

宗像市役所秘書課の好意により、十一月八日民官特使待遇で念願の「伽耶国」を訪れた。直ちに金海市役所を表敬訪問、宋銀復市長は和やかにオガチクラブを出迎へてくれた。つづいて、市教育長、金海女子中学校とあたゝかな接遇を受けた一行は、金海文化院、李炳泰院長にお会いすることが出来た。

早稲田大学留学生であった李先生の流暢な日本語に一同感銘、早速自露王陵を見学、王陵の保存には金大中氏の尽力が大きいと先生は語る。

本日最後の見聞地大成洞は、近年相次いだ発掘調査で「伽耶国」の厚いベールをはがしつつあり、日韓の考古学界の間で注目を浴びている古墳群である。同地では今、第三次調査隊が汗を流がす。熱い視線を注ぐ面々。大成洞の丘に立った感激は、オガチクラブにとって大きな思い出となるであろう。

第三六五回　宗像大社歌会詠草

中村吾郎選

毎月末日〆切

赤間ヶ丘　松本　澄子
並びゐる水鳥同じ姿勢にて池の木陰にをりを動く
（評）恐らく鴨の仲間であろう。『同じ姿勢』『をりを動く』の照応の良さに依り生かされた歌と言える。

池田　小田　イセ
売られゆく豚は車の上にゐて心重たげにわれを見てをり
（評）豚が心を持っているわけでもないが、此の『心』は作者の心である。故に一句があり、五句がある。

大島　屋形　トミエ
昏なずむ夏の浜辺は静もりて水平線に漁火ゆらぐ
（評）取り立てて言うべき事もないが、素直で丁寧な描写が浜の光景を彷彿とさせ、読者を誘いこむ。

田熊　鷲頭　かつ代
投薬を待つ間は長ししづかなるざわめき充つる待合室に

武丸　中村　さつき
調教師の顔を見ながら懸命に二歳の子猿時に歯をむく

香椎　桜井　ツ子
金色に煌きめぐる小鳥のむれ秋定まりし明時にして

八幡西　山田　アヤ子
二百余りの水子地蔵の風車カラカラ廻り遊ぶ如見ゆ

池田　小田しめの
船旅の下船間近き海峡にふるさと訛りにぎやかとなる

河東　薄　かほる
星ひとつ吸ひこまむとて上弦の月白じろと冴え渡るかな

自由ヶ丘　津江富美子
松林つづくこの路昼暗く車窓に遠く地の島の見ゆ

吉留　高山　信子
三十五年使い古せし流し台別れのしるし酒注ぎやる

小倉北　松木　政子
照り渡る白一色のパミルの雪原見つつ機内食を持つ

八幡西　川崎　ウラ
思ひきり木蓮の枝切り落とす秋日のさして部屋の明るし

小倉北　槇原　静子
吹き荒れし風のおさまる森の道枝折れ散りて樟の香に満つ

名古屋　小田　喜一
にわたずみ光れる庭をわたり来し揚羽は白き木槿に遊ぶ

光岡　竹浦　葛明
秋の日のつるべ落としの田に出でてすげ笠かぶり稲を刈りいつ

自由ヶ丘　細川　絹子
庭内の木立に撒ける水しぶき西日の光ひきて滴る

吉留　白木うめの
三叉路の藪の地蔵に日の射さず頭つるりと伏目に在す

城南ヶ丘　中間日出子
境内の苔のむしたる樫の木は老木にて貫禄のあり

福間　本松　宣子
残月の影ふみて行く散歩路はもの暗けれど秋の香のする

八幡東　古賀ハツネ
台風にいたぶられしか黒揚羽地に這ふ姿哀れみて見つ

大島　目原　節子
溪こむる霞ひらけば大滝のおのずと耀き一条に落つる

田熊　力丸　一郎
二百年を過ぎたる神社の榊の木を台風倒しぬ十九号の

福岡東　清原　絹代
訪ね来し丘に眞赤き曼珠沙華去年より丈の低くなりたる

滋賀　岩瀬　辰夫
農友に早場米を頂きぬ試食せよとの心嬉しき

沖・中両宮秋季大祭

好天に恵まれて

宗像大社沖津宮・中津宮両宮の秋季大祭が旧暦の九月十四、十五日にあたる十月二十一、二十二日の両日、秋晴れの絶好の日和に恵まれ盛大裡に斎行された。

漁業を中心とする大島もこの日は漁止め、大漁、操業安全を祈念して島民挙げて大いに賑う。

大祭前日の十四日、午後三時より青空に国旗「日の丸」、幟が翻り、奉賛会、翼賛会の奉仕により、〆縄も新しくなった中津宮境内で地主祭を、同五時より沖津宮遥拝所と中津宮において宵宮祭を斎行した。

翌十五日午前八時半より宮崎区の厳島神社秋祭。

同九時、岩瀬の沖津宮遥拝所において沖津宮秋季大祭を斎行。海上五十キロの遥か沖合に浮かぶ沖ノ島を拝しながら敬虔な祈りを捧げた。

同九時半には、大島最高峰御嶽の頂に鎮まる御嶽神社において秋祭斎行。

午前十一時に、中津宮秋季大祭を斎行。祭典時刻には村内外からの参列、参拝者で境内は立錐の余地もない程となった。

太鼓の音が境内に響き祭典開始。宮司の国家皇室の安泰と弥栄、大漁満足を祈る荘重な祝詞奏上に続いて、氏子奉幣使の奉幣詞奏上、雅楽の荘重な調べが流れる中巫女二名による浦安舞が奏され、参列者はしばしの間異次元の世界に身をおいているようであった。

祭典終了後、宮司より沖津宮、中津宮、辺津宮三宮の〆縄用新藁奉納者に感謝状と記念品が贈呈された。

午後一時からは子供相撲、二時からは演芸大会が催され、境内は終日大いに賑った。

村内の多くの方々の奉仕と協力により斎行された秋の大祭も、夕刻には滞りなく終了した。

秋季大祭の氏子奉幣使と感謝状贈呈者は次の通りである。

氏子奉幣使　上野　智行
感謝状　村上　進
感謝状　山口　栄
（敬称略）

出光興産㈱創業八十周年祭

並びに物故者慰霊祭

明治天皇御生誕の日にあたる十一月三日、出光興産㈱創業八十周年記念式典並びに物故者慰霊祭が、東京プリンスホテルに於いて斎行された。

同社は明治四十四年門司市（現北九州市門司区）で出光商会として産声をあげてより、満八十年を迎えると共に、同社創業者出光佐三店主が亡くなられて十年になる。

この節目の年になる本年の記念事業として執り行われ、当日の慰霊祭には四百余名が参列した。

定刻十時義父宮司以下祭員が入場参進、所定の座についた。

次に開式の辞が述べられ修祓の後、故出光佐三店主の御霊をはじめ、創業以来同社の発展に尽力された物故者の御霊を迎え、養父宮司が祝詞奏上、御霊の平安とこれからの社業の安全、業務繁栄を祈念した。

引続き出光興産㈱社長出光昭介氏より「店主の訓を忠実に実践し、社会のために国家のため、そして世界のために全員仲良く一致協力して努力いたします」との祭詞が奏上された。

その後宮司玉串拝礼、出光社長、遺族を代表して日田馨子氏、最後に従業員を代表して和田朗氏が玉串拝礼を行い、慰霊祭は厳粛且つ滞り無く斎行された。

午前十時四十分より同会場に於いて創業八十周年記念式典が執り行われた。

式典終了後、同ホテル庭園内に於いて出光大家族会が開催され、約四千名の家族連れで会場は大いに賑いだ。

第二十回 奉納剣道大会

菊の花咲き薫る晩秋の十一月三日、当大社本殿脇の境内に於て、恒例の秋季奉納剣道大会が開催された。

当大社の奉納試合は春秋共に古来より行なわれて来た野試合の形式をとり、昭和四十六年の遷宮を記念して発足し、今年で二十年目を迎えた。

大会には小学生から大学生までの男女約六百名が参加、まず試合に先立ち花田新太郎剣道連盟宗像支部長に合わせて拝礼し、正々堂々と試合に望むことを神前に誓った。

早朝より詰めかけた選手や父兄、折しも境内では西日本菊花展が開催されていて拝観客等で会場は一杯となった。

試合は各パートに分かれ礼儀正しい作法ときびきびとした試合態度で、日頃稽古で鍛えた技と気力を存分に発揮せんものと、「エイ」

「ヤア」の気合に満ちた掛け声で、汗と埃にまみれながら激しくぶつかり合う熱戦を繰り広げ訪れた大勢の観衆から温かい声援が送られた。

この熱戦も午後三時過ぎには決着し、早朝より終日境内を賑わせていた打ち合う竹刀の響も止んだ。かくして遷座三十周年を奉祝する大会も無事終了した。

尚、当日の成績は次の通りである。

◇男　子

小学一年の部
優勝　飯塚　太　池野
二位　相馬友弘　赤間西
三位　毛利正敏　赤間西

小学二年の部
優勝　吉武秀員　玄辰館
二位　香月練平　日の里東
三位　橋川益幸　日の里西

小学三年の部
優勝　吉廣精人　赤間西
二位　中橋功介　赤間西
三位　溝添　昭　赤間西

小学四年生の部
優勝　安部　豊　岬
二位　瀧下賢一　赤間西
三位　倉地研介　南郷

小学五年生の部
優勝　溝上直也　玄海
二位　田島久生　赤間西
三位　岩下浩次　自由ヶ丘

小学六年の部
優勝　花田浩気　河東
二位　魚住　徹　岬
三位　船木　悟　日の里東

中学一年の部
優勝　浜田健児　玄海
二位　香月洋一郎　日の里
三位　須藤真司　自由ヶ丘

中学二年の部
優勝　井上豊継　玄海
二位　小門賢悟　福間東
三位　斉藤福太郎　日の里

高校・大学の部
優勝　本田達矢　九州高校
二位　嶺　公司　九州高校
三位　松永一郎　九州高校

◇女　子

小学一・二年の部
優勝　阿部香菜恵　玄辰館
二位　大沼　愛　東郷
三位　青谷麻理　玄辰館

小学三・四年の部
優勝　中山麻衣子　東郷
二位　吉田千沙子　東郷
三位　義原真季　東郷

小学五・六年の部
優勝　高向統子　玄海
二位　安松恵子　河東
三位　瓜生菜穂子　東郷

中学生の部
優勝　山内智子　玄海
二位　藤村淳子　自由ケ丘
三位　岩下朋美　自由ヶ丘

高校・大学の部
優勝　江口昌子　福教大
二位　鳥羽さやか　東海大五
三位　築地美由紀　福教大

第十七回 奉納吟剣詩舞道大会

第十七回宗像大社秋季奉納吟剣詩舞道大会が、境内に三千鉢の菊花が咲き誇る十一月三日、明治節の佳日に、午前九時より、清明殿に於て開催された。

今大会も、熊本の清香吟社と同社宗像本部の会員の方々が中心となり参加者約一〇〇名が、自慢の「のど」を披露した。

参加した会員の方々は、日頃の鍛練の成果を今日の檜舞台に、遺憾無く発揮され互いの技量を称え合っていた。

午前十一時には、御本殿に於て、奉納吟剣舞式が行なわれ、先づ、会長益中鵬山先生が、「宗像大神を詠ず」の格調高い吟を奉納、続いて、大会委員長福家宝山先生が、力強い剣舞を披露、最後に会員全員にて、合吟を奉納、迫力ある吟が境内に響き渡って参拝者もしばし足を止めて聞きいっていた。

午後よりは、息の合った三曲合奏あり、気合の籠った剣舞、続いて、師範の先生方の情感溢れる吟詠が次々と披露され、参加者一同しばし聞き惚れていた。又来賓の北九州鶴州会の先生方が風格ある吟詠を披露されると会場から盛んな拍手が沸き上がっていた。

今大会も盛り沢山のプログラムも午後三時には全て終え、最後に全員で当会の益々の発展を祈念し万才三唱をして閉会した。

今大会は、特に宗家である益中櫻月・鵬山両先生・宗像本部の福家宝山先生に永年に亘り斯道興隆に御努力された御功績に対して、当社より、感謝状と記念品を贈呈し、感謝の意を表した。

第十八回 宗像本因坊戦

本因坊に福間町の浅見六段

宗像地区囲碁愛好者待望の宗像本因坊戦が、当大社境内に馥郁とした菊香薫る十一月四日、清明殿、斎館を会場に開催された。

この本因坊戦は、宗像地区の囲碁界実力ナンバーワンを決定する大会で、例年多数の愛好者が参加、熱戦を繰り広げている。第十八回目を迎えた本年も、有段者約百五十名が参加、四・五段以上の実力者による本因坊戦と、一般参加の有段者の部が行われ、会場は熱気と緊張感溢れた空気が漂っていた。

午前九時三十分頃より参加者達が次々と集合、対局開始前には小早川会長に合せて全員が、宗像大神に健闘を誓った。同十時、いよいよ対局開始、各会場で真剣勝負が始まった。盤上をジッと見詰め、相方が勝負の行方を読み合う姿には、近寄りがたいものを感じた。

本因坊戦の決勝戦は、福間町在住の浅見六段と宗像市在住の春口四段による、古豪と新鋭の対局となった。盤上に石を打つ音だけが響く静寂の中、両者相譲らぬ手に汗握る対局となったが、最後に浅見六段に凱歌が上り、宗像本因坊の栄誉を手にした。

尚、当日の成績は次の通りである。

宗像本因坊
福間町　浅見　忠雄六段

準優勝
宗像市　春口　勲児四段

三　位
津屋崎町福永　雅通六段

一誌一話 (12)

吾々が住んでいる所は

樂　岑　子

悠遠の昔、宗像にも、ここを拠点に生活をしていた先住者がいる。宗像市の市史編纂委員会では宗像一帯の地質調査（北九州大学地質学亀山徳彦教授）を行い、当時の地形図を作成し、この度発表している。この図は約六〇〇〇年前、いわゆる縄文時代前期頃のムナカタの姿である。宗像大社神宝館三階にも同様の地形図を掲示している。

地形図をみると、宗像の中央を流れる釣川はいまよりも広く、かなり奥まで入り江が入り込んでいる。平野部は非常に少なく、ほとんどが泥湿地帯をなし、すぐ丘陵部と接している。いまの宗像大社本殿の辺りまでが海に面した海浜をなしていた。一方玄海町神湊から津屋崎町渡半島までは砂嘴状に砂丘が続いている。

考古学の世界では、縄文時代から弥生時代頃（約六〇〇〇年～二〇〇〇年前）にかけての日本列島の海岸線は、今よりも平均的に五～一〇米も高い位置であったとしてきている。いわゆる当時の海の水位は高かったわけである。それは、当時の貝塚遺跡が証明してくれている。宗像でも鐘崎の上八貝塚（三〇〇〇年前）や、もうすでに潰滅しているが、宗像高校から中央中学にかけての台地上に構成されていた弥生の遺跡―田熊遺跡（集落群？）、神湊の浜宮貝塚（一四〇〇年前）などがその良い例である。

また地形図によると、玄海町神湊から津屋崎町の渡半島にかけての砂嘴状につづく砂丘は、その内側に広い内海を形成して神湊の牟田池までと続いている。いまの通称産業道路が当時の海岸線であった。この線に沿う段丘状の台地には二三〇基からなる古墳が群列している。ここに葬られているのは海上の民古代宗像族であり、ここは彼等の墓域である。死して後も海上をみつめている様である。

この砂丘は「海の中道」そのものであった。いまでは福岡市和白から志賀島までが海の中道と呼ばれているが、かつては津屋崎の砂丘帯がそうであった。室町時代中期の連歌師宗祇法師は全国を旅し、歌を指南しているが、『指南抄』に「桂潟海の中道宗像にあり」と記す。また「筑紫道記」には勝浦嶽から渡半島までながくつづく道を海の中道としている。勝浦から梅津・渡への砂丘の内側の干潟を江戸時代中期の寛文・延宝頃、「入海の中を石垣にて築き、水田を開く、塩浜付近に塩田を造り、塩を焼き四方に販き売る」と言う。

地名の一つをとりあげてみるが、釣川の東側に接した河東部落の内に稲元という名がある。ここに架かる東郷橋架橋工事で、籾の圧痕がある夜臼式土器（約二五〇〇年前）が採集されている。この辺りが縄文時代最后頃の平野部の先端地であったと考えられる。今もこのあたりから赤間一帯が、宗像で一番広い平野を形成し、名前からしてもここが宗像の稲作紀元の土地ということが言える。

地形図はみるだけでも古代の文化を想像することが出来る。いろいろ思考をかさねながらも郷土と、郷土史をひもどくうえでの良い資料でもある。

第二十一回 西日本菊花大会

内閣総理大臣賞に船越順一氏（大野城市）

宗像大社秋の神賑行事として行われている。西日本地区最大の菊花展、西日本菊花大会（主催・宗像大社菊花会、後援・福岡県他）も本年で二十一回を迎え、西日本地区はもとより全国各地の菊花愛好家の関心を集め、十一月一日より二十三日迄当大社境内に於て、盛大に開催された。

本大会開催に当り、十月二十日、宗像地区商工会青年部及宗像菊友会々員、菊花会々員有志の奉仕により、展示ハウス一〇〇余棟が特設された。

二十七日には、福岡、佐賀、北九州、宗像、粕屋、遠賀各地の協賛会社により提供されたトラック五十数台により、福岡県内を始め、九州各地より銘菊三千余鉢が搬入され、この日、宗像青年会議所会員の奉仕により菊花の荷下ろし作業が終日行われた。

本大会の特色は出品鉢数が多いことと菊花の種類の豊富なことである。何れも各地の予選を通過した逸品ばかりで、期間中参拝者に、非常な好評を博していた。

三十一日、奉納菊花展奉告祭が午前十時より、本殿にて斎行され、室園正敏審査長以下審査員、高田太助会長を始め会員一同参列し開会を祝した。

開会式に引き続き審査会が行われた。

審査会は、室園正敏県農業試験場園芸研究所長を審査長に、同所小林泰生花き花木室長、坂井康弘研究員、谷川孝弘主任技師、中村新一県花き専門技術員、藤本鷹光日本盆栽協会福岡支部顧問を審査員として、公平かつ厳正な審査が終日行われ、各部門別に一位より最下位までの順位が決定、第二十一回西日本菊花大会最高位の内閣総理大臣賞は審査員合議により全員一致で大輪部門第一位船越順一氏に決定した。

尚、各賞の受賞者は次の通りである。

（内閣総理大臣賞）
大輪部門
船越　順一　大野城市
（農林水産大臣賞）
懸崖部門
石松　正廣　南区
（文部大臣賞）
盆栽部門（五鉢組）
長谷川　良治　城南区
（通商産業大臣賞）
特作部門（古木添木作）
櫻木　為生　田川市
（運輸大臣賞）
総合花壇部門
高山　包夫　宗像市

（内閣官房長官賞）
小品盆栽部門
早川　馨　八幡西区
（科学技術庁長官賞）
特作部門（嵯峨菊花壇）
平田　泰輔　博多区
（環境庁長官賞）
懸崖部門
高田　太助　八幡西区
（建設大臣賞）
大輪部門
時田　義光　鳥栖市
（宗像大社宮司賞）
田中康道　八幡西区、安河内ユキ子　粕屋郡、猿渡俊光　大牟田市、大穂正義　城南区
（九州農政局長賞）
船越　順一　大野城市
（福岡県知事賞）
大保弘信　直方市、石田御年　粕屋郡、桑原忠夫　八幡西区、陣内重義　佐世保
（佐賀県知事賞）
妹川尚生　三養基郡
（熊本県知事賞）
後藤雪翠　熊本市
（長崎県知事賞）
金子黄顕　佐世保市
（福岡県議会議長賞）
山本義雄　遠賀郡、西村正幸　筑紫野市、阿部正士　遠賀郡、本田国雄　遠賀郡
（福岡県町村会々長賞）
川崎正木　嘉穂郡、渡辺道直方市、呉屋大雪　小倉南区、山口義實　八幡西区
（福岡県町村議会議長会々長賞）大穂正義　城南区、岩倉秀夫　直方市、上野正之　城南区、高田太助　八幡西区
（福岡県教育委員会賞）
大谷政二　飯塚市、池田昭八幡西区、吉田松雪　八幡西区、木本勇　鹿本郡
（全日本菊花連盟賞）
車石裕　小倉南区、大保弘信　直方市
（九州・山口花卉園芸連絡協議会々長賞）　井本義光　下村連、中村昭、小島文雄
（九州花卉卸売市場連合会会長賞）　田中祐成、古賀春次、徳水重義、赤崎肇
（福岡県農業協同組合中央会々長賞）　長崎弥太郎、後藤雪翠、古波蔵正忠、石丸五年
（福岡県観光連盟会長賞）
辻野好房、中原貞次、田中恒雄、上野正之
（福岡農林事務所賞）
高椋良和、石橋善治、小島文雄、高島雪茂
（福岡商工会議所賞）
高山勉
（九州旅客鉄道（株）賞）
馬場園馨、今村忠夫
（福岡県花卉園芸連合会々長賞）
秋本光司、千々和正信
（福岡県花卉市場協議会々賞）　山崎厳、西山時秋、吉住萬吉、大穂絹子
（粕屋郡町長会々長賞）
松尾緑、鎮守成明
（遠賀郡町長会々長賞）
永田ツルミ、山本馨
（宗像郡町村長会々長賞）
田中敏子、清家仙三、高木シトエ、池口盛信、波左間稔、藤原友男、吉武阜月、山口義實
（宗像郡町村議長会々長賞）
車石裕、石田脩、長井芳雪、高椋良和
（遠賀町長賞）
最所孝子、伊藤タツ子
（芦屋町長賞）
永島文男、広渡一富
（水巻町長賞）
古川誠、井野今朝人
（古賀町長賞）
村井猛男、今村忠文
（宗像市長賞）
許斐保、植木雪子
（津屋崎町長賞）
田代定、長井芳雪
（福間町長賞）
堤勇孝、今里恒策
（玄海町長賞）　久保田勝巳、吉田耳、安藤達男、山田英水、谷崎勇、斎藤辰次、清家仙三
（大島村長賞）
福田親晴、占部ユキ子
（玄海町観光協会々長賞）
石田御年、成冨明、古波蔵正忠、吉武阜月
（宗像大社菊花会々長賞）
池口盛信、石田桂子、成冨明、田代定、古川誠、馬場園馨
（遠賀郡農業協同組合長賞）
三口澄夫、竹内雪豊
（宗像郡農業協同組合長賞）
波多野松男、河野林、広渡峰子、楠理
（津屋崎町商工会長賞）
網脇倉子
（宗像市商工会長賞）
白石喜佐夫
（福間町商工会長賞）
青谷真五郎
（玄海町商工会長賞）
池上福元
（大島村商工会長賞）
田畑実志
（宗像大社氏子会々長賞）
安永儀三郎、大神利夫、最所孝子、福添利治
（玄洋福岡ライオンズクラブ賞）　田中定吉、寺田智一、波多野松男、大穂絹子
（紙湊旅館組合賞）
守田広男、古賀春次、田中祐成、赤崎肇
（宗像青年会議所賞）
大神利夫、矢野茂、村井猛男、猿渡利光
（宗像地区商工会青年部賞）
山本義雄、西山時秋、鮫島辰志、堤勇孝
（中原ガーデン賞）　福田まれえ、三口澄夫、川崎正木、池田昭
（株）サカタのタネ賞）
鮫島辰志、福添利治
（ヨシカネ特別賞）
千々和正信、成冨明、村井猛男
（自由花壇）
特選　八幡南部秋芳会
優等賞　遠賀郡友会、村井猛男
入選　福本大次郎、宮小路喜彦、水巻町菊花会、芳栄会、筑豊菊友会

第二十一回西日本菊花大会協賛会社

出光興産（株）、（株）新出光、臼杵運送（株）中九州支店、福岡営業所、西久大運送（株）、久留米運送（株）、西鉄運輸（株）、宗像貨物（有）、（株）宗像グリーン、本田工業（株）、城山家具（株）弘江組、吉武造園（有）、貞兼運送（有）、久田運送（株）、マルヨシ醤油、平田産業（有）、楠建設、龍栄運輸（株）、第一運送（株）、（有）遠賀運輸、北九州開発（株）、国松石材（株）、

以上大会開催に際しては、皆様の御厚意、ご協賛に対し、誌面を以ちまして厚く御礼申し上げます。

第二十一回 西日本菊花大会 審査講評

審査長　福岡県農業試験場園芸研究所長　室園　正敏氏

本年の気象は、昨年の夏・秋季の異常高温と暖冬の影響、三～四月の天候不順で発育が例年に増して不良で育苗に苦労されたと推察される。その後、八月下旬から九月に台風が九州西岸を相ついで北上したため、被害は大きく例年より出品点数が減少したが、特作部門にバラエティーに富んだものが多く、名実ともに西日本一の菊花展の様相であった。

①大輪の部（十二鉢花壇）

春先からの継続的な天候不順、台風の襲来で菊の生育が心配されたが、良品の出品が目立った。鉢全体的にはボトリチス病の発生も認められず、上位は花色、花容ともに優れ、調和も整っていたが、葉害の発生、葉の反巻等が減点され順位を確定した。

上位入賞できなかったものについては、花のボリウム不足、上位葉の小型化、花色の配色方法等が優劣を決める材料となった。

②盆栽の部（五鉢組）

本年の盆栽では例年人目をひく古木物の出品が少なく、上位入賞者は岩付き、木付き、寄せ植え鉢等が全体的にまとまっていた。

審査基準から五鉢が異なる仕立てであることは重要であるが、盆養の点で優れるが出品規格に合格しない為減点されたものもある。

③懸崖の部（三鉢組）

大懸崖の一位は見事な出来であったが、例年にくらべると全体的にボリウムがやや劣っていた。

静崖型は出品も多く、努力のあとがうかがわれた。主枝と側枝のバランスに欠くものや表現に工夫を要するものがあった。

④小品盆栽の部

例年と同じ出品数であった。出品規格に合った樹形が木枠とよく調和しており、近年にない出来であった。上位作品の懸崖作りは主幹の曲げ、枝の配置が良く、花の添えも全体を引きしめていた。根上がりでは、値の張り方に誤ったものもみられた。

⑤ダルマ作りの部

全体的に上位の出品物は、高度な培養技術と共に展示効果を高めるための品種選択が行われるなど素晴らしい出来であった。

⑥福助造りの部

上位は技術的に大きな差異はなかったものの天候不順で肥培管理がもう一歩であった。

⑦その他

一文字菊、嵯峨菊、古木添木等多種多様の出品で菊花展全体が引きたっており、いずれも力作であった。

灯台記念日

宗像大社に感謝状

十一月一日は灯台記念日

福岡海上保安部では、この日を記念して日頃航路標識業務に協力している民間人を招いて表彰した。

神社界では、宗像大社（宮司　養父守）が選ばれ、当日太田権宮司に、同庁で桜本保安部長より感謝状と記念品が授与された。

宗像大社は、辺津宮・中津宮・沖津宮の三宮からなり、沖津宮（福岡県宗像郡大島村字沖ノ島）は、内陸から朝鮮半島を結ぶ洋上六十キロ、玄界灘に屹立する周囲四キロの神島、沖ノ島に鎮座している。

この島に灯竿、望楼が設けられたのは、明治三十七年四月から、大正九年一等灯台になり、永い間灯台職員がこの島へ交替で勤務した。昭和四十六年、灯台事務所が海岸の埋め立て地に建設され、これに伴い灯台職舎も山上から海岸へ移された。この頃、宗像大社も沖津宮社務所をこの埋め立て地に新築したが、昭和四十八年灯台事務所が集約無人化されるに及び、同社沖津宮勤務神職が灯台の監視補助並びに気象、海難救助等の通報協力を行うことになった。

長い年月の間には、灯台導灯の不点灯など思いがけない事故もあり、航路標識業務、及び海難救助業務に対する神職の度重なる協力が、この度の表彰の理由となっている。

沖ノ島は全島が宗像大社の所有で史跡に指定され、歴史上では四世紀後半から大和朝廷による大規模な祭祀が斎行され、その祭祀遺品である膨大な神宝類十二万点は国宝・重文に指定されている。

当社では、神島沖ノ島の祭りを厳修すると共に、現地での補助業務に一層協力する体制をとっている。

社務日誌抄

十月一日～三日
宗像大社秋季大祭
十月一日　織幡神社祭
太宰府天満宮　宗像警察署　上田グループ
かすび塾参拝
十月二日　宮地嶽神社　箱崎宮　遠賀宗像会等参拝
十月三日　福岡県護国神社
伊豆県議、小山県議、和田玄海町長　西川芳泉氏等参拝
十月五日　東京光運会大宮支部東京支店関大宮支部長外十三名参拝
伊万里市遺族会四十名参拝
十月六日　天皇陛下東南亜細亜還幸啓奉告祭斎行
十月九日　九州朝日放送記者白井賢一郎氏沖ノ島取材の件にて来社
太宰府天満宮との懇親野球大会
十月十日・全国光友会々長中野太平氏夫妻参拝
小石川大神宮々司小野迪夫氏、（財）佐々木奉公会一行十名参拝
十月十二日　的原神社祭
万葉を訪ねる旅　犬養孝氏、網干善教氏外四五〇名参拝
長崎活水女子短大山本氏外同窓会十三名参拝
十月十三日　コスモメイト福岡支部十名参拝
十月十四日　玄海町消防団秋季大祭警備反省会
十月十五日　月次祭
トヨタ・ヤングドライバーズクリニックin福岡開催
十月十六日　神興小学校一三六名遠足の為来社
十月十七日　献茶祭
表千家々元而妙斎千宗左宗匠奉納・出光興産（株）社長出光昭介氏外関係者、表千家福岡同門会役員等参列
玄海東小学校　二〇〇名社会科見学の為来社
十月十八日　神社本庁事業課長丹生氏昭若外一名参拝
十月二十日　近畿日本鉄道（株）事務局近畿文化会課長武部宏明氏外三十五名参拝
宗像地区商工会青年部七十名、宗像大社菊花会役員及宗像菊友会三十五名菊花展示ハウス建設作業奉仕
十月二十二日　沖中両宮秋季大祭
十月二十三日　赤間西小学校六年生二五〇名遠足の為来社
十月二十七日　第二十一回西日本菊花大会菊花搬入・（財）宗像青年会議所奉仕
十月二十八日　伊勢神宮祢宜神原佑司氏参拝
十月二十日　（株）宗雅井商会会長今泉清美氏、同常務森下喜久年氏、九州液化瓦斯福島基地（株）総務部業務課長山田幸男氏参拝
十月三十一日　東京銀行副頭取小早川敏彦氏並福岡支店長参拝　上西郷
小学校五十名社会科見学のため来社　第二十一回西日本菊花大会開催（十一月二十三日迄）

宗像大社歌会 俳句作品集（三四四）

熟れ初めし棗に偲ぶ故郷かな　藤沢　井上　玄洋

橋渡る山のトロッコ初紅葉　若松　井手　清隆

広げほす傘に落葉の二、三枚　自由ヶ丘　細川　絹子

山子立つ　福間　森　清

田島放生会馬車で詣でし昔なつかしし　名古屋　小田　喜一

熱き茶を欲しと思へり月のぼる　名古屋　小田　留子

子の頬に赤きねこざのあと見たり　福　間　二宮　末子

潮鳴りの夜やこおもりも眠りにつく　津屋崎　井浦　良介

ゆく雲を映し澄む水棚ほとり　田　熊　力丸　一郎

台風の余波に散り来る枝葉かな　滋　賀　岩瀬　辰夫

士鈴一つ買ふて秋日の休め窯　日の里　花田いつ枝

駅　名古屋　小田　留子

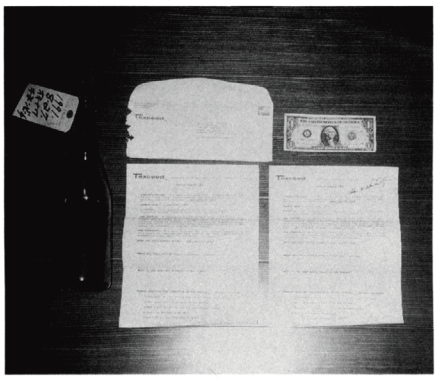
窯　福岡中央　力丸　玄風

秋高し雲一朶置き田は黄金　津屋崎　井浦　良介

（続）浜の寄物 62

沖縄の海岸から（二）

いしいただし



沖縄に漂着したビンは、早速、アメリカへ拾った状況、そして写真などを添え、また何本ぐらい投入され、日本周辺で回収された数などを問い合わせて、十月九日に送った。十一月上旬、アメリカから返事が来た。以下その内容である。

(一)、一九八八年から南カリフォルニアの海岸の埠頭（パルボア、ニューポート、ハンティング埠頭等）約北緯33°40′の地点から沖に向かって約三〇〇メートル行った所から、ビンを落とし始めた。そのビンのほとんどは二十キロ以内で発見された。沖に向かって十マイルの所に落としたビンは、（北緯32°43′、西経119°30′）のサンニコラス島の付近で、漁船から落としたビンは、今なおチャネルアイランド（イギリス海峡の島）の海流の中で漂っているままである。この一九八八年の第一回目の試験により、私はこの実験を成功させることは、思っていた以上に難しいのだと実感した。

(二)、毎年二月～四月の期間、私はパイロットである友人といっしょに飛行機をチャーターしてサンタバーバラ（北緯34°25′、西経119°46′）西に向かってポイントコンセプションを経由し、太平洋へと飛行し、時速70海里のスピードで空中より約一〇〇個のビンを一列状態で落下させた。その場所はニューポートビーチから沖に向かって約二〇〇マイルの位置である。そのビンはシャンペンのボトルと二リットルの容量のポリエチレンのビンである。どちらの種類のビンについても、そのうち半分には、海錨として六メートルの釣糸で重いポリエチレンの袋をつないでおいた。しかし海錨があるか、ないかということはガラスのビンの場合は関係ないようだ。ちなみに、今年は全体で三五五本のビンを落下させた。ポリエチレンのビンはどれも発見されていない。

(三)、十四個のビンがフィリピンで発見されている（東サマル島では二回も！）例えばルソン島北部、イザベラ、カガヤン、カファンダンスなど。こうした漂着の場所は風の向きや海流と一致している。また二個のビンがハワイ（ハワイ島とオアフ島）で発見されている。さらに北緯5°52′、西経162°06′のパルミラ島、ブラジルのリオデジャネイロ、コロンビアのメデリンからも見つかっている。

日本で見つかったものも一個ある。鹿児島県奄美大島で、これは一九八八年三月二六日にサンニコラス島から海へ落下させたビンで、一九九〇年十月八日に発見されている。海錨はついていた。ちなみにフィリピンまで漂着するのに約一年半かかっている。最も長期間、海を漂っていたビンは北緯12°5′、東経102°25′のタイ国のシャム湾のロンナアポから発見された。

(四)、ガラスのビン（重量は軽いもの、重いもの十五リットル入りのシャンペンのビンで非常に重いものと三種類に分類した。）は海錨がたとえついていなくても、水面上にビンの約70％を表出した状態で浮いている。ポリエチレンのビンは水面すれすれのところをかすって漂う。

ポリエチレンのビンは風によって漂流のスピードを増すものと思われる。それからポリエチレンのビンは屋根の上で二年間、太陽にさらしておいた。この方がガラスのビンと違ってこわれにくくなるようである。

(五)、赤いゴムのふたとプラスチックの止め具が付いていたのに完全には中身が乾燥した状態ではビンが漂着しなかったというのは石井氏の例が最初である。これまで発見されたビンのいずれの場合においても、ビンを開ける時は皆必ずビンを割っている。なお生物の付着はいずれの場合においてもおこっていない。

（訳・岩井環）

まつりと生活（四十三）

稲作と神道

神道は「祭り」という行為を中心に発達した信仰であり、宗教です。その中でも豊作を神に祈る春の祭り（祈念祭）と豊作を神に感謝する秋の祭り（新嘗祭）は神道祭祀の中心として、今日に至るまで連綿と続いています。

たとえば古い祭りを記した書物を見てみると、祈念祭をはじめとして、その大部分が稲作農耕に関係した祭りであり、五穀豊穣の祈願を目的としたものです。

ところで、古事記・日本書紀に記された神代の話の中には、天照大御神さま自ら田を耕し、米作りをされている姿が描かれています。そして、ニニギノ命が中津国（我々が住んでいる世界）に天降る時、天照大御神さまは、高天原の稲穂をニニギノ命に授けました。こうして、高天原の神々の主食であった稲米が皇孫（ニニギノ命）に与えられたことから日本でも稲が作られ、食べられるようになったと伝えています。つまり、天照大御神さまは、稲穂をもって私たち国民生活の基本を示されたと言えます。

お祭りの祈願の目的、神饌、そして神話の語る稲の伝承などを考えると、日本人は稲と深くかかわって信仰をはぐくんできたことがわかります。

また日本人の生き方の様式、考え方を形成してきたのも、この稲を中心とする農耕文化だと言えます。

それは我々の祖先が大地に対し、自分たちの力を加え、しかも自然に逆うことなく、大地を人間の営みに適するように工夫を加えていきました。

こうして自然の威力に左右される農業は、自然の威力を仰ぎ祀らざるを得なくなったのです。つまり稲もまた人の努力と、天地自然の恵みをもってはじめて、豊かに稔ると考えたからです。

農耕作業は、一人の力だけでは豊かな稔りを期待することはできません。播種植付・除草・収穫と人々は互いに協力し助け合いながら作業を行わなければなりません。日本人の集団意識人間同志の協力意識がこうして発達してきたのです。

このように我々日本人の祖先は稲とともに暮らし、勤しんできました。

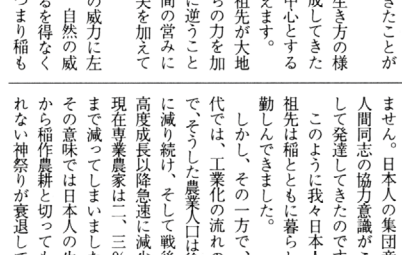
しかし、その一方で、現代では、工業化の流れの中で、そうした農業人口は徐々に減り続け、そして戦後の高度成長以降急速に減少、現在専業農家は二、三％にまで減ってしまいました。その意味では日本人の生活から稲作農耕と切っても切れない神祭りが衰退していくのもやむ得ないといえます。ところが、初詣や厄祓、七五三、初宮詣で、商売繁盛、病気平癒、交通安全、合格祈願など、さまざまな人々が今も神社に出かけ、神さまに祈り願うことが定着しています。

神様にご祈願する形は、農耕儀礼から個人祈願の場に変わってきているといえます。それは現代人の生活スタイルの変化が大きな理由といえますが、それでもなおかつ神々への深い信頼と畏敬があるのはなぜでしょうか。それは、基本的には日本の神々が、山や川や海などといった自然そのものを信仰の対象とする自然信仰を基盤としているからです。

我々の祖先は、自然の摂理を人間の知恵や善悪の意識、損得の計算を超えたすぐれた徳を持つものとして考え、そのさまざまな事象にそれぞれ神様の存在を感じながら自然と共に生きてきたのです。

今、我々日本人は、日々の暮らしを支え、恵みを与えてくれる豊かな自然に感謝し、大切に守っていかなければなりません。

Y・S記



神郡宗像（六）

田中政喜

第三編　国造県主時代

第十三代成務天皇五年（西紀（元年）国造県主を設置された年から天智天皇三年（六六年）近江大津に遷都されるまで五百三十三年間

（弥生式文化時代、古墳（文化時代から歴史時代）

第一章　神功皇后と宮地嶽

（息長帯比売命）と共に天皇二年親しく征伐にむかい、穴門（長門）豊浦宮に駐駕された。八年の春に車駕は、筑紫の儺県（博多）に行幸され、橿日宮（香椎宮）で、熊襲征討の軍議を行われた。たまたま皇后は御神託に「先ず新羅を討つべし」とのお告げがあったが、天皇は、これに従われず、親しく新羅親征を敢行された。

しかし戦に利なく、九年の春には橿日宮の行宮で、崩御になった。皇后は天皇の喪を秘して、ひそかに御尊体を豊浦宮に御棺にして移され、御身は親ら小山田の邑（粕屋郡山田）に斎宮を造営になって、御禊してあつく御祀になったといわれている。いよいよ御神託によって皇后は武内宿祢と共に新羅親征に向われた。先ず宗像の地で、はるか大海原を望み戦勝を宗像三女神、外天神地祇に祈られ、暫く滞在された。よってこの地を宮地と唱え、宮地嶽ということになった。当地皇后は御妊娠の身重であられたが、男装に甲斐しく軍旅を整え玄海の波濤を越えて三韓の地に渡り、この大事業を陰に陽にお助けになった。八百萬神をはじめ、宗像三女神の御威徳を忘れてはならない。

宮地嶽神社

本社は明治初年頃から釜山若は九州一円は勿論全国津々浦々から参集して、その数は凡そ数百万に及ぶといわれ明治五年村社に明治三十二年に県社になった。御祭神は神功皇后を中心にその征韓に戦功の多かった勝村大神藤高慶及び勝頼大神藤助腐の二公を併せて宮地嶽三柱の大神と称え、さらに宗像三女神を奉祀している。

神功皇后の御戦勝と勝村勝頼の名を因んで物に勝つということで、勝利、開運、延いては災難消除の神として社会全般の尊信するところとなって、参詣の人が絶えることがない。

この神社の設立年代については千六、七百年前といわれているが、元和の火災に旧記、社宝はほとんど焼失して、僅かに口碑に残っているのみである。ただ近年神社の境内にある岩屋不動という古墳から貴重な珍しい古代の遺物が発見されてから、紀元前三、四世紀ごろからの霊地であったことが立証された。

宮地嶽腹から上西郷、福間、神興、津屋崎地方に散見する。先住民族の居住地に対してこの古墳は、かれらの長（氏の上）の霊を、かれらの住居を見渡せる小高い台地に葬って、年毎の祭祀を行い、永遠の守護と福利を祈ったものであろう。現在では古墳内に不動尊を祭祀しているが、これは発掘者が内部の遺物に尊厳と恐怖とを感じて仏像を安置しお祀りするようになったのであろう。

岩屋不動窟

一、円墳　三十二個の巨石を重ねる石室

高さ二六m余　幅一六m余　長さ二七m余

頭椎の大刀（日本一の大刀？）

二、遺品

銅金の壺鐙

ガラス板、玉、銅鏡など

なお先年瑠璃の骨壺出土

唐草模様覆道の鞍

なお頂上近くに降雨旱天にも増減もなく汲んで、しばらくさらしても腐朽しないという桜が池という水の名所があって、元和の火災以前まで神饌調理にこの水が用いられたという霊水がある。

第二章　織幡宮

神功皇后の新羅降伏以来半島諸国との交通が盛んになるとともに、中国の文化は半島を経由して、わが国へぞくぞくと伝来した。第十五代応神天皇の世、中国人の弓月君、阿知使主は、わが国に帰化して、養蚕織物の法を傳え、阿知使主は、その後、天皇三十七年春二月勅命によって、呉の国（中国で揚子江南部地方）へ織工女を求めにいった。その帰路筑紫に上陸した時、宗像の大神が、工女などを乞われたので、兄媛、弟媛、呉織、穴織の四婦女のうち、兄媛を大神に奉った。

この兄媛が筑前国の「御使の君」の祖先である。今御元というのは、御使人の訛で鐘崎の織幡神社は、織幡の名から織女兄媛を祭祀するとも伝えられている。

阿知使主はその後三婦女をつれて都に上り、すでに天皇崩ぜられていたので皇子鷦鷯尊（第十六代仁徳天皇）に献上した。

織幡の由来

織幡の由来は、武内宿祢が、神功皇后に渡海の折に軍旅を整え、軍旅を織らせたといわれ、後応神天皇の世勅命によって筑紫に降った時（織女兄媛帰化前三十年）度々この鐘岬佐居形山に遊行されて、風光明媚を称賛されて、

「この地は本朝無双の霊地なり、我死なば霊をこの地に安んぜん。而して国土安穏の守護神となん。」

と申され、その後第十七代履中天皇の世武内宿祢は、この山に登って、他界された。それで壱岐直眞根子の子孫が、その遺言によって、この山に葬り和魂を祀って沓塚とともなえ、さらに荒魂の表を建てし異敵退散の守護神とされた。その後壱岐家の子孫は代々この宮に奉仕して、今日に及んでいる。

織幡神社の御祭神は、武内宿祢命、相殿に住吉大神、志賀大神を合祀して、明治五年村社になり、同十五年に郷社に、昭和三年八月に県社に昇格した。

つづく